

【特別寄稿】

日本家政学会被服衛生学部会部会員の皆様に感謝して

成瀬正春

金城学院大学名誉教授、名古屋文化短期大学学長

この度、日本家政学会被服衛生学部会（以下、被服衛生学部会）名誉会員の称号を頂戴いたしまして、誠に光栄に存じます。1998年、被服衛生学部会部会員として皆様のお仲間に入れていただきました。当初より今日に至るまで、田村照子先生、平田耕造先生をはじめ、部会員の皆様には、多大なご指導ご鞭撻を賜ってまいりました。心より、感謝申し上げます。

被服衛生学部会幹事として、1999年8月には、被服衛生学部会会報の編集を担当させていただきました。総頁数73ページに及びました。執筆をご担当いただきました部会員の皆様に感謝申し上げます。2001年3月には、「衣服と健康の科学、最前線 ～あなたの健康を守る衣服～」をテーマとした公開講座を、日本繊維製品消費科学会東海支部、繊維学会東海支部、日本繊維機械学会東海支部の共催、愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会の後援のもと、愛知芸術文化センターで203名の参加者を得て開催しました。部会員を中心とした10名の講師の先生方のご講演後、活発な総合討論が繰り広げられました。2008年8月には、名古屋市のトヨタテクノミュージアム、有松・鳴海絞会館、竹田庄九郎邸および久野染工場で、「被服衛生とナチュラルファイバー」をテーマに夏季セミナーを開催しました。懇親会では、トヨタテクノミュージアム内の特設会場で、生演奏を聞きながら被服衛生学の未来をあつく語り合いました。

2009年4月から2013年3月までは、未熟な小生ですが、被服衛生学部会の部会長をつとめさせていただきました。力不足な小生をお支えくださいました部会役員および部会員のすべての皆様に心より感謝申し上げます。2009年度には、山崎和彦先生を中心とした編集委員会の皆様によって、被服衛生学部会会報が「被服衛生学」へと刷新されました。その主な変更点は、査読付きの論文が掲載されるようになったことです。この改革によ

り、部会機関誌の質の維持向上とともに、大学院生や若手研究者の投稿の機会を活発化することができました。2011年度には、被服衛生学部会誌発行30周年を記念して、菅井清美先生、諸岡晴美先生、三野たまき先生、平林由果先生を編集委員として「アパレルと健康—基礎から進化する衣服まで—」が、日本家政学会被服衛生学部会編で発行されました。37名の部会員のご執筆により、それぞれの先生方の得意とする研究分野の最新情報を盛り込みながら、アパレルと健康の関わりを解説していただきました。日常生活に活かせるアパレルの基礎から進化する衣服までの最新情報がいっぱい記載された素晴らしい書籍を発行することができました。

小生が、今日においても被服衛生学の分野で働かせていただけるのは、被服衛生学部会の研究仲間に入れていただき、ご指導ご助言を賜りました部会員の皆様のおかげでございませう。心より感謝申し上げます。現在、名古屋文化短期大学では、被服衛生学を担当しています。学生は、ファッションを中心に勉学に励んでいます。衣服の快適性と機能性繊維の仕組みについての講義は大変興味深く聞き入ってくれます。

被服衛生学部会の活性化と新たな発展の為に何かお役に立てていただけることがございましたら、甚だ微力ではございますが、お声がけください。

末筆ながら、被服衛生学部会の益々の発展と、部会員の皆様のご活躍とご健康を心より祈念申し上げます。

---

<連絡先>

〒461-8610 名古屋市東区葵1丁目17-8  
名古屋文化短期大学 成瀬正春  
TEL: 052-931-7112  
Eメール: m-naruse@yamadagakuen.ac.jp

【特別寄稿】

## 被服衛生学部会の発展を願って

— 感謝を込めて —

諸岡晴美

京都女子大学家政学部

### はじめに

この度は「名誉会員」にご推挙いただき、厚くお礼申し上げます。「証」の文面には「本会に尽力され、顕著な業績を残されました」とあります。私自身がどれほど部会に貢献できたかは定かではありませんが、このような荣誉ある称号をいただけたことに対しまして大変有難く存じております。

この度の件で、私の被服衛生学部会入会年から、各種役職の年度をお調べいただきました。私自身は、日々雑多に過ごしているだけで、他学会も含めてほとんど記録を残しておりませんでしたので、改めて、お調べいただきました現・役員の方先生方に感謝申し上げます。貴重な部会の紙面をお借りして、様々なイベントを企画した時の思い出などを語らせていただきたいと思います。

### 企画責任者として

入会が 1998 年度とのこと、もう四半世紀になるようです。材料学部会の鎌田先生のお誘いからであったと記憶しております。また、大先輩である伊藤紀子先生のお薦めでもあったと記憶しております。

企画責任者としては、文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費「研究成果公开发表 (B)」の計画・申請に始まり、公開講座「衣服と健康の科学、最前線—衣服の働きと新素材の性質—」と題して実行委員長として富山県民会館で開催させていただきました (2005)。私が所有する多くの測定機を持ち込み、参加者に体験していただくコーナーを設け、各スポーツアパレルさんや各繊維メーカーさんのご協力のもと、展示パネルや実際の製品をお借りして、参加者が手に取り、また実際に測定して体感していただくことを目指して企画しました。このようなやや無謀な計画を立てたため、多くの部会員の皆さんに多大なご協力を願うこと

になりました。特に、菅井清美先生には計画や準備の段階から、数度に渡り車で新潟から応援にかけつけていただきました。また、富山県産業技術研究開発センターの中橋美幸さんにも精力的に手伝っていただきました。当日は、参加の部会員の皆様にも測定機や展示品の前に立って説明していただきました。もちろん私のゼミ学生全員が泊まりがけで協力してくれました。3 月の開催であったため、県外からの学生のほとんどがもう下宿を引き払っており、ホテルでの宿泊となりました。その時は、こんな点からも年度末の開催は難しいと思った次第です。しかしながら多くの皆様のご協力のもと、私の少し無謀とも思える公開講座も成功裏に終わることができました。

### 副部長として

三十周年記念事業の企画として、「三十周年記念誌の発行」と、夏季セミナー時の「シンポジウムの開催」、「単行本の発行」という 3 本の計画を立てました。三十周年記念誌は三野たまき先生、単行本発行は菅井清美先生、シンポジウムは諸岡が責任者となり、互いの協力のもと執行致しました。

記念誌は過去の資料の整理という点でとても大変な作業であったと思っておりますが、膨大な作業量をこなしていただきました。単行本についても簡単ではなく、部会員の先生方 37 人に執筆いただき、編集するという作業を致しました。菅井先生を中心に、三野先生、諸岡で作業を開始、富山のホテルに泊まりがけでコンビニおにぎりをかじりながら作業したことも今は楽しい思い出となっています。途中からは平林由香先生にも加わっていただき、何とか完成することができました。

執筆頂いた先生方には、重複図表や重複内容がある場合などは、かなり強引ともいえる指摘をさせていただきますが、快く受け入れてください

ました。今更ながらではございますが、お詫びとお礼を申し上げます。また、単行本としてまとめるにあたり、田村照子先生には多くのご助言をいただきました。お蔭さまで、執筆者が非常に多いにも関わらず、統一感のある単行本『アパレルと健康—基礎から進化する衣服まで—』ができました。

シンポジウムにつきましては、当時のセミナー実行委員長の小柴朋子先生他、実行委員の先生方に大変お世話になりました。長野県にある文化学園大学研修施設「文化北竜館」というとても自然豊かで素敵な場所での開催となりましたこと厚く感謝申し上げます。こうして、三十周年記念事業の責任をどうにか果たさせていただきました。

### 第35回被服衛生学セミナー実行委員長として

関西が当番ということで、お引き受け致しました。その頃、京都文化交流コンベンションビューローの『京都らしいMICE開催支援補助制度』が始まって2年目で、まだ認知度が少ないということを知り、これに応募して約30万円の補助金をいただきました。補助金対象として「(A) 京都らしい文化プログラム」、「(B) 京都らしい伝統産業製品」があり、双方で補助金をいただきました。参加の皆様には芸舞妓体験をしていただき、手書き絵柄の小袷紗をお土産としてお配り致しました。大変喜んでいただいたように思います。申請には、深沢太香子先生が大変尽力くださいましたことを申し添えさせていただきます。

しかし、同じところにドジョウはいないようで、翌年の日本繊維製品消費学会の年次大会でもMICEに応募いたしましたが、残念ながら5万円のみでの支援でした。事務局のがっかりした顔が今も忘れられません。

懇親会の話に終始しましたが、セミナーの内容も講師の先生方のお蔭をもちましてとても充実したものになっていたことをご報告いたします。

### 終わりに 一益々の発展を願って—

この寄稿を執筆するにあたり、これまでの活動を振り返ってみました。大変なこともありますが、今は楽しい思い出しか記憶に残っておりませ

ん。既にご存じかと思いますが、繊維学会、日本繊維機械学会、日本繊維製品消費学会の統合が進んでいます。部会の皆様におかれましては、仲間の絆を大切になさってください。そして、被服衛生学部会が50周年、60周年と迎えられることを願ってやみません。

大学の業務はますます増え、一方で研究業績が重視される時代となっております。部会や学会の庶務的な仕事に時間がさけない状況になっておりますが、そこから学ぶこと、仲間の先生方から学ぶことが多いのもまた事実です。

部会の先生方の今後ますますのご活躍を祈念しております。

最後に、この紙面をお借り致しまして、多くの活動に快くご協力いただきました先生方に厚くお礼申し上げます。

ありがとうございました。



『京都らしい MICE 開催支援補助制度』による「(A) 京都らしい文化プログラム」での、芸舞妓体験(懇親会の一風景、がんこ高瀬川二条苑にて)

### <連絡先>

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町 35  
京都女子大学家政学部 諸岡晴美  
TEL・FAX: 075-531-7174  
Eメール: morooka@kyoto-wu.ac.jp

## 【特別寄稿】

## 被服衛生学に育てられて

岡田宣子

元東京家政大学教授

「被服衛生学」に初めて出会ったのは、お茶の水女子大学の学生時代、医師であられた田多井吉之介先生の授業です。当時、渡辺ミチ先生からは、「被服構成計画論」をご教授いただきました。

1969年に私は、家政学研究科・被服学専攻の修士課程を修了<sup>1)</sup>し、関東学院女子短期大学の非常勤講師になりました。1978年からは専任となり「立体構成・平面構成」の授業を担当しました。柳沢澄子先生の被服構成学研究室の研究生、大妻女子大学人間生活科学研究所研究員を経て、近藤四郎先生のご指導のもと、1986年に学術博士を取得<sup>2)</sup><sup>3)</sup>しました。この研究は3世代揃った家族を対象とした家系調査であったため、運転免許をとり、計測機器を搬入し家庭訪問で遂行しました。また当時は、多量のデータ処理には大型計算機が必要で、パンチカードにデータを打ち込み、関東学院大学のFACOMの統計パッケージ・ANALYSTで解析しました。多変量解析では林知己夫先生の数量化Ⅲ類を用いたのですが、著書「数量化の方法」を読んでも理解不十分で、作成したプログラムの出力結果の解釈に戸惑うことになり、何回か電話で質問させていただいたのですが、大変ご多忙な先生から、出力結果を持って渋谷の研究所に来るようにとお誘いがあり、それ以降、折に触れてご教示いただきました。本当にありがたかったです。

これまで、形態学・人類学的アプローチで研究を進めていたのですが、1988年に文化女子大学の被服衛生学研究室に移りました。

「被服衛生学」へのアプローチに不安を感じた私は、研究日を利用し医学部の研究生になり、ご指導いただきながら生理学を学ぶことにしました。医学部の図書館を自由に利用できたことも幸

いでした。東邦大学の岩村吉晃教授から授業を受けつつ、附属保育園の園児の成長・発達を観察<sup>4)</sup><sup>14)</sup>させていただきました。杏林大学の平井直樹教授からは実験基礎を、体性感覚誘発電位の脳波測定<sup>5)</sup>を通して教えていただきながら、今後の研究によからうということで重心動揺計を自費購入し、色々試みつつ有効な測定法を固めてゆきました。

本実験には機器運搬者と被験者が必要で、研究費確保のために、科学研究費を頂けるよう心掛けました。フィールドワーク<sup>6)</sup><sup>7)</sup><sup>8)</sup><sup>9)</sup>が主体でしたが、自宅を実験所とすることも多々ありました。

2001年に東京家政大学に移り、被服衛生学研究室を持つことになりました。中里先生から譲り受けた研究室の備品がなんとありがたかったことか、人体計測器もありました。古いボディも高齢者のボディ作成に後で役立てることができました<sup>10)</sup>。1人の研究室なので多忙でしたが、卒業研究を学生と共に楽しみながら進めることができ<sup>11)</sup><sup>12)</sup>、充実した幸せな時を過ごすことができました。2011年に日本家政学会賞<sup>13)</sup>、日本人類学会功労賞を頂き、2015年に定年退職致しました。

これまで着手できなかった卒業研究の成果を整理し投稿<sup>14)</sup><sup>15)</sup><sup>16)</sup><sup>17)</sup>を続けていましたが、ライフステージの終盤にさしかかる現況を勘案して断念し、シンプルライフを心掛け過ごしています。最近では、脱ぎ着しやすい衣服ゆとり量<sup>18)</sup>と高齢者の身体機能の加齢変化<sup>19)</sup>に関する研究結果を、正に地で行っていると実感しています。

「被服衛生学」に巡り合うことで強い刺激を受け、多くの皆様からの温かいご教示とご助力を頂きながら、「被服衛生学」に育てられ、お陰様で、

研究領域を広げ推進することができました。誠にありがとうございました、深く感謝しております。

人間・被服・環境系における衣生活の向上を目指して、健康・安全・快適性の観点からアプローチする被服衛生学は、今後、求められる重要な研究分野になると思われまます。部会員の皆様方の益々のご活躍と、被服衛生学部会のご発展を心よりお祈りしております。

- 1)岡田宣子. 日本人の身体比例の年齢的变化. 人類学雑誌, 1971, vol. 79, no. 2, p. 139-150
- 2)Nobuko OKADA. Assortative Mating of Modern Japanese. A Study by the Method of Family Line Investigation. J. Anthropological Society of Nippon, 1988, vol. 96, no. 3, p. 301-318
- 3)岡田宣子. 日本人成人女子に見られる身体形質の近代化と衣生活意識との関連性. 家政誌, 1988, vol. 39, no. 7, p. 699-710
- 4)岡田宣子. 子供のボタンのかけはずし行動からみたしつけ服の設計. 家政誌, 1996, vol. 47, no. 7, p. 701-710
- 5)岡田宣子. 衣服圧の生体に及ぼす影響 体性感覚誘発電位を指標として. 織消誌. 1995, vol. 36, no. 1, p. 138-145
- 6)岡田宣子. 高齢者服設計のための基礎的研究 若年・中年との比較に基づく高年の身体運動機能と着脱動作. 民族衛生, 1999, vol. 65, no. 4, p. 182-196
- 7)岡田宣子. 足の踵の高さが中年女子の立位保持姿勢に及ぼす影響. 人間工学, 2004, vol. 40, no. 3, p. 155-162
- 8)岡田宣子, 渡部旬子. 高齢者服設計のための基礎的研究 腕ぬき・腕入れ動作に対応したかぶり式上衣服の設計. 家政誌, 2008, vol. 59, no. 2, p. 87-98
- 9)岡田宣子. 高年健常者と障害者の椅座位着脱

- 動作特性に基づく快適衣服設計 重心動揺を指標として. 衣服学会誌, 2014, vol. 57, no. 2, p. 95-109
- 10)岡田宣子, 坂田真穂. 高齢者の体型変化に対応した快適衣服設計 70歳代女子の衣生活の改善に向けて. 家政誌, 2013, vol. 64, no. 11, p. 715-724
  - 11)岡田宣子, 鐸木夏美. 子どもの着衣行動の発達からみた快適衣服設計. 家政誌, 2013, vol. 64, no. 10, p. 623-635
  - 12)岡田宣子. かぶり脱ぎしやすさに対応した快適衿あき寸法. 家政誌, 2014, vol. 65, no. 9, p. 551-521
  - 13)岡田宣子. ライフステージに対応した快適衣服設計. 家政誌, 2011, vol. 62, no. 9, p. 569-580
  - 14)岡田宣子, 江原亜由美, 建石晃子, 渡辺さくら. 乳幼児の身体成長の縦断的研究. 東京家政大学紀要, 2015, vol. 55, no. 2, p. 23-34
  - 15)岡田宣子, 江原亜由美, 山口屋瑛子. 身長と体重からみた女子成長の縦断的研究. 東京家政大学紀要, 2016, vol. 56, no. 2, p. 47-57
  - 16)岡田宣子, 橋本文子, 黒江美奈子, 江原亜由美, 平川早紀, 野溝典子. ウエストにかかる衣服圧の姿勢別検討 カフベルトとゴムベルトのかかわりについて. 家政誌, 2016, vol. 67, no. 1, p. 1-13
  - 17)岡田宣子, 橋本文子, 江原亜由美, 立山裕美. ユニバーサルデザインからみた快適ウエスト寸法. 家政誌, 2016, vol. 67, no. 12, p. 682-691
  - 18)岡田宣子. 高齢者服設計のための基礎的研究 高齢者の脱ぎ着しやすい衣服ゆとり量. 家政誌, 2004, vol. 55, no. 1, p. 31-40
  - 19)岡田宣子. 高齢者の身体状況と被服に求められる要件の加齢変化. 家政誌, 2005, vol. 56, no. 6, p. 363-368